

論文

地域メディア活動への 子どもの参加動機とその阻害要因

守田 健人 實方 亜由美 中村 雅子

東京都市大学環境情報学部中村研究室では、2009 年度より、子どもを対象とした地域メディア活動を支援してきた。本研究では、このような自発的な活動に参加する子どもたちが、本活動に参加する動機について、アンケートや参与観察、情報共有サイトでのコミュニケーションの観察などで多面的に把握することを試みた。また一部の子どもたちの参加率の経年変化（低下）の原因についても考察した。その結果、子どもたちが、遊びの延長や友だちづき合いといった周辺の理由よりも、活動自身の面白さや、主体的な目的意識、および成長への意欲を持って取り組んでいることが明らかになった。また、活動参加の阻害要因として、大半が小学生が占める本活動で、年齢の上昇によって他の参加者とのコミュニケーションに物足りなさが生まれること、取材から地域活動への参加へと、より踏み込んだ地域参加に関心がシフトしている例があること、などが見出された。本分析により次年度以降の研究室としての活動支援の指針を得ることができた。

キーワード：地域メディア活動、つづきジュニア編集局、参加動機、阻害要因、自発的参加

1 問題意識

子どもたちが自発的に参加する地域活動については、実態としての参加率等の調査は散見されるが（例えば千葉県柏市教育委員会ほか、2010）、その参加動機については、個々の活動の特徴によっても異なるため、体系的な調査研究は乏しい。

一方、筆者らの研究室では、2009 年度より継続的に子どもによる地域メディア活動である「つづきジュニア編集局」の支援を行っており、今年で 4 年目を数える。1 年ごとの活動だが、毎年、新規に入ってくる子どもがいる一方で、前年から引き続き参加する子どももいる。しかし、その中で、継続参加しているながら、参加率が減少している子どもがいることが明らかになった。図 1 は、2011 年度と 2012 年度の活動の参加率を、つづきジュニア編集局への参加開始年別に示したものである。2009、2010 年度から 2 年以上参加している子どもの参加率は減少しており、2 年目の参加になる子どもの参加率は上昇していることが読み取れる。また、2012 年度から参加した新期の子どもの参加率が最も高く、活動の継続年数が増えるほどに参加率は少なくなっ

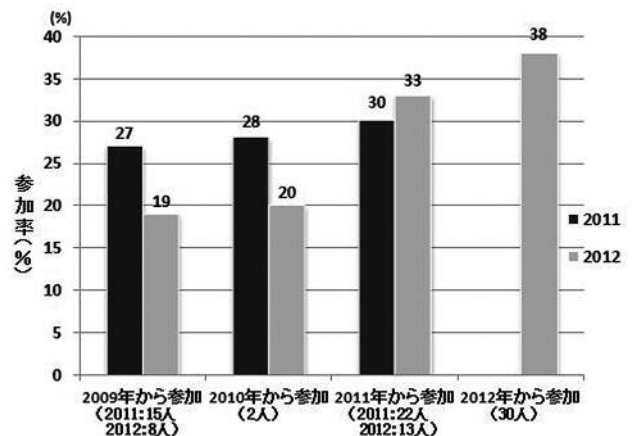


図1 参加開始年別の参加率

ている。このグラフからも継続して参加していた 1、2 期生の子どもの参加率が減少していることがわかった。このため本分析では、つづきジュニア編集局に参加する子どもたちが、活動にどのような意義を見出して参加しているのかを明らかにするとともに、参加を阻害する要因についても考察し、これらの知見から次年度以降の本活動の支援の仕方について提言を行うこととした。

2 先行研究

中村研究室では、活動を開始した 2009 年度から区や運営主体、参加した保護者らの理解を得て、子どもたちの引率支援を中心に活動に参加させてもらい、新たなメディアとの関わりから生まれる学びについての研究を行

MORITA Takehito
東京都市大学環境情報学部情報メディア学科2012年度卒業生
SANEKATA Ayumi
東京都市大学環境情報学部情報メディア学科2012年度卒業生
NAKAMURA Masako
東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科教授

ってきた。

2009年度は成果として、子どもたちが取材経験を多く積むことで、記者としての意識が高まり、新聞やニュース、インターネットへの興味・関心が増したという結果が見られた(井上, 大川, 2010)。

2010年度は、メディアリテラシー能力の向上が期待できる学習環境の構築というテーマを掲げ(小野田, 野徳, 室町, 2011)、情報発信の表現方法や、責任を自覚する、情報の発信者としてのメディアリテラシー能力、および、根拠のない情報や、情報操作から内容を客観的に分析し、批判的に読み解く、情報の受信者としての能力の重要性をあげた。そして、これらの能力を育成する場としてこの活動を位置づけ、メディアリテラシーを4つの複合的な要素、情報収集力、取材力、情報発信力、情報批判力からなるものと捉えて、それぞれの変化について検討した。その結果、これらの要素は互いに独立して変化するのではなく、循環的に向上していくという知見を得た。

2011年度については、「社会力(門脇, 2002)」の成長を検証した。その結果、社会力を形成する上で必要なプロセスとして考えられた、他者への関心や地域活動に貢献する姿勢が、本活動への参加の中で成長していくことが観察された。

これらの研究では、主に、つづきジュニア編集局の活動を通して身に着力についての検証を行ったが、今回問題意識に挙げたような、子どもたちから見たつづきジュニア編集局への参加動機については中心的には検証されてこなかった。

ただし、2011年は11月に当時の参加者について、保護者アンケートを行っており(郵送法)、回答に協力した保護者26名の中では、子どもがジュニア記者に参加した経緯について「お子さんの意思(8名)」「保護者から勧めた(15名)」「どちらともいえない(3名)」と、全体としては、参加のきっかけとして親の勧めが多いことが確認されている。一方、実際の参加は子どもの自由意志によるが、保護者によれば、8項目の複数回答で、子ども自身が「面白そうだった(23名)」「取材活動に興味があった(17名)」「勉強になると思った(10名)」などが、参加動機と推定されている。一方で、「知り合い、友だちがいた(1名)」「知り合い、友だちに誘われた(1名)」などの対人関係を動機として推測している回答はわずかだった。

また同じく、2011年12月に行われたジュニア記者自身に対する事後アンケートでは、「ジュニア編集局の一番いいところはどこだと思いますか」という質問に対して、21名の回答者のうち最も多かったのは「いろいろなところに行ける(8名)」次いで「記者の体験ができる(6名)」であり、「友だちができる(3名)」「取

材の後に友だちと遊べる(0名)」などの回答は少なかった。

今回、作業仮説を構成する段階では、学生スタッフの間では、子供同士のコミュニケーションの場を増やした方が良いのではないかと考えていた。昨年の活動の中で子どもたちがお互いの名前を十分に覚えていない場面が観察されていたこと、また、子ども同士のコミュニケーションが円滑に行われていれば、取材記事を書く際に取材メモを共有し、メモしきれなかった部分の補填をすることなど、協同的な活動が促進され、よりよい内容の記事を書くことができるのではないかと考えたからである。

レイヴ&ウエンガー(1993)では、活動に向けた仲間との相互作用が実践にとって重要であることが指摘されている。このような観点からも、対人関係をより緊密にするような働きかけをすることで、子どもたちが一層ジュニア記者としての活動に充実感を感じ、積極的に参加して、結果として活動の質の向上にも寄与するのではないかと考えた。

3 目的

参加動機については、上記のような経緯から、記者活動への関心や、取材への興味関心以外に、友だち作りなどの、活動内での仲間との関係が重要な役割を果たしているのではないかという観点を持って、フィールドノーツの分析を進めた。また実際にコミュニケーション場面を増やすために、昨年実施されていたクリスマス会のほかに、6月の比較的早い段階に、学生が中心となって、友だち作りに役立つようなレクリエーションのイベントを開催した。

一方、参加率減少の原因については、ブレインストーミングの結果をKJ法で整理し、最終的には大きく分けて4つの要因を仮定した。①活動への飽きや活動自体がつまらない、魅力を感じなくなった ②多忙で時間がとれなくなった ③自分の(年齢的な)レベルに合わなくなった ④他の、より魅力ある活動への参加が優先された の4点である。

4 フィールドの概要

「つづきジュニア編集局」は、2009年度に横浜市都筑区の区制15周年と横浜市の開港150周年を記念して、都筑区が主催して始まった事業である。区の委託を受けて、特定非営利法人I Love つづきが運営母体となり、開港150周年事業や都筑区の催し、出来事、人物などを取材して、区とリンクした編集局のホームページから情報発信することで、普段あまり地域に関心のない住民や子どもたちにも関心を持ってもらうことを目的とした広報活動である。小学生から高校生までの広い範囲

の年齢層の子どもたちに参加を呼びかけ、主に休日や放課後を中心に活動を行っている。

2011 年度からは、2010 年度まで共催であった都筑区役所が退き、NPO 法人ミニシティ・プラス、東京都市大学中村研究室の共催の事業となって活動を続けている。

今年のジュニア記者は、小学 4 年生から高校 3 年生までの男女合わせて 53 名（男子 16 名、女子 37 名）。子どもたちは、企画部・社会部・文化部・国際部の 4 つのチームに分かれ、イベントや取材から記事作成を行うことで、都筑の魅力伝えていく。企画部は全体運営と、他 3 つの部のサポート取材をし、文化部は都筑区の文化的活動について、社会部は都筑区の公共施設について、国際部は都筑の外国に関わる場所について取材をするという位置づけであった。ただし実際の運用ではあまり部の区別なく、参加できる子どもたちがそれぞれの取材に参加する形が主となった。

つづきジュニア編集局での取材活動の流れは、以下の通りである。

- ① 全体会議で取材先の希望を出しあい、選定する（取材先との交渉は主に NPO スタッフが行う）。
- ② 取材に行く（NPO スタッフもある程度同行するが、基本的には学生スタッフがほぼすべての取材に同行）。
- ③ 情報共有サイト NOTA 上に決められた担当者が記事をアップし、他の取材参加メンバーも感想や記事へのコメントを記入する。
- ④ 記事について NPO と学生スタッフが確認し、取材先にも了解をとって不十分な部分や間違いがないかチェックする。
- ⑤ 完成した記事をホームページに掲載する。

また、取材活動だけでなく、Ustream を使った動画配信によるメディア発信も行った（図 3）。

学生スタッフは編集会議での話し合いのサポート、取材活動への引率同行、ジュニア記者が書いた記事へのアドバイスや文章の添削、子どもたちが主催のイベントの当日手伝いなどを行った。取材先の開拓や交渉、完成し

表1 2012年度の活動内容と回数

会合	回数
全体会議(説明会, 記者講座, レクリエーションなどを含む)	8 回
打ち合わせ(部ごとの会合や放送局準備など)	2 回
編集部取材	15 回
つづきジュニア放送局(Ustream 公開放送)	1 回

上記は述べ回数。4月から12月の間の活動。活動自体はその後も第2回公開放送など、3月にも行われている。



図2 活動の様子 (1)
6/30 なでしこジャパン 永里選手取材



図3 活動の様子 (2)
11/17 つづきジュニア編集局イベントこども放送局
(いずれも著者ら撮影)

た記事のホームページへアップ（注 1）、事業としての運営義務は主に NPO スタッフが行った。

5 調査方法と結果の概要

5.1 参与観察

「つづきジュニア編集局」の小 4～高 3 のジュニア記者 53 名を対象に、著者 2 名を含む中村研究室同プロジェクトの学生 8 名が大学生スタッフとして編集会議や取材に参加・同行した。当日参加した学生スタッフ全員がそれぞれフィールドノート（以下 FN）を作成、また写真にも記録した。

5.2 NOTA の観察

ジュニア記者の内部向けのコミュニケーションサイト NOTA（注 2）を作り、そこで活動のない日でも常時、記事の原稿のやりとりや自由な交流をしてもらった。書き込みの有無と内容、書き込みをした人について、毎日記録をとり、やりとりの分析を行った。

5.3 アンケート調査

事前（2012年4月21日）、事後（2012年12月16日）に実施。事前アンケート（回答数36名）：希望取材先、参加のきっかけやスケジュールなどを質問した。事後アンケート（回答数27名）：活動（会議および取材）の参加動機や、どのような取材先に興味を持ったのかなどを質問した。

5.4 スタッフインタビュー

NPO法人ミニシティ・プラスのスタッフ2名と中村研究室の大学生スタッフで、今年度と来年度のつづきジュニア編集局についての話し合いの場を設け、許可を得てその意見交換を録音記録し、分析した。

5.5 特命子ども地域アクターの取材

特命子ども地域アクターとは、平成24年1月から、神奈川県、NPO、企業が協働で取り組んで来た「神奈川県特命子ども地域アクター養成アクション」の活動。子どもが実際に行われている地域活動に参加するもので、参加先の活動例としては、障害者の制作物を扱うネットショップの商品企画、地域のアートイベントの手伝い、地域のタウンマネジメント協議会への参画などである。この地域アクター活動には、つづきジュニア編集局に参加している子ども54名中12名が参加している。我々は、合同会議（2011年10月7日）と、成果発表会（2011年12月2日）に参与観察を行った。

5.6 他の同様の活動を行なっている団体への取材

地域メディア活動に子どもが参加している17団体にメール・電話での取材を依頼し、うち7団体から協力を得た。「西日本新聞こども記者」には電話で取材を受けていただき、「四街道子ども記者クラブ」については実際に活動に参加し、参与観察を行った。他の5団体にはメールのやりとりで取材を行った。

6 結果

ここでは仮説と対応させてその事例を紹介する（イタリックの部分は、当日のFN、およびNOTA書き込みからの引用、カッコ内の実名はFN記録者）。

6.1 子どもの参加動機について

事後アンケートでは27名の子どもから回答を得ることができた。「つづきジュニア編集局の活動に行こうと思うきっかけは何ですか」と複数回答で尋ねた結果、【会議の時】は「勉強になるから」という回答が21名、「活動が楽しいから」という回答が20名で、いずれも過半数以上の回答を集めた。また、【取材の時】は「勉強になるから」という回答が19名、「取材先に興味があるから」という回答が21名、「活動が楽しいから」という回答が20名であった。「友だちが行くから」という回答は会議、取材時ともに2名だった。以上の結果から、子どもたちがつづきジュニア編集局の活動に参加する動機は、友達がいるからというより、勉強になるから、活動が楽しいから、取材先に興味があるからという、活動自体の魅力によるということがわかった。

また参加観察からは以下のような事例が得られた。

また参加観察からは以下のような事例が得られた。

事例1 取材先への興味：SSさん：2012年6月30日 なでしこジャパン永里選手取材

SSさんは今年から参加している小学5年生女子で、社会部に所属している（参加回数：11/23回（参加回数/全活動日）、記事作成回数：1回）。この日は、都筑区の牛久保西公園にて、なでしこジャパンの永里選手が子どもたちにサッカーを教えに来ているということで、取材を行った。取材に参加する子どもたちとの待ち合わせ場所で、SSさんと話をした。以下の事例は、仲の良い友達に参加しなくても取材に参加すること、参加の動機は取材先への興味であることを示している。

まだ来ていない子どもを待っている間、SSさんが沢山話かけてくれた。

SSさん「今日TSちゃん来ないんだよ。来れないって言ってた…」（TSさんとは同じ学校でクラスも同じらしい）

實方「そうなんだー」

SSさん「うん、そうなんだー。今日サインもらえるかなあ？もらえたら学校で見せるの！」

實方「そっかあ、サインもらうのは難しいかもしれないけど、しっかり取材してこようね！」

（6月30日 實方FN なでしこジャパン永里選手取材）

また、取材後に記事担当の子が記事を書く時に、みんなの感想が参考になるのではないかという考えから、今回の取材に参加した子ども全員に感想を言ってもらう時間を設けたが、そこでもSSさんは、「なでしこジャパンに興味があったので参加できてよかったです（6月30日 實方FN なでしこジャパン永里選手取材）」と語り、取材先に興味があったことが参加の動機であることが読み取れる。

事例2 将来の目標のため：TMさん：2012年8月3日 つづきマイプラザ取材

TMさんは今年から参加している小学5年生女子で、国際部に所属している（参加回数：10/23回（参加回数/全活動日）、記事作成回数：1回）。昨年度は文化部に

所属しており、8/26 回と、全体の平均参加率（22%）を上回る参加率であった。TM さんは「特命子ども地域アクター」の活動にも参加している。

この日は、都筑区のノースポートモール内のつづきマイプラザの取材を行った。取材をして行く中で、質問に答えたマイプラザのスタッフが子どもたちに「取材について一番大変な事、入ってよかったことについて順番に教えてください」と尋ねたところ、TM さんは以下のことを答えていた。以下の事例は、将来の目標のためという具体的な目的が参加の動機であることを示している。

TM さん「去年母の勧めで入らされて、最初は大変そうだな、と思ったり、取材で区の方と話すことなどが嫌だなと思ってたんですけど、私にはアナウンサーになりたいという夢があって、学校でも放送部なんですけど、それだけでは…とっていて、ジュニア放送局ならネットにも載って世界中の人達に見てもらえるので、入ってよかったな、と思っています。」

（8月3日 實方 FN つづきマイプラザ取材）

事例 2 から、TM さんはつづきジュニア編集局には親の勧めで入ったものの、活動している中で自分の夢という目標に向かって、自分なりの目的を持って能動的に取材活動に参加するようになったことがうかがえる。

事例 3 NPO スタッフの認識：2012 年 12 月 16 日
スタッフインタビュー

12 月 16 日のクリスマス会後に、NPO スタッフ 2 名と中村研究室の大学生スタッフおよび中村で、今年度と来年度のつづきジュニア編集局についての話し合いの場を設けた。以下の事例は、子どもたちはレクリエーションなどのコミュニケーションの場でも、何かを学ぶ姿勢で取り組んでおり、NPO スタッフは、つづきジュニア編集局ならではの活動、経験に期待して参加していると認識していることがわかる。

「私が初めに会議やりますって言わなければ一日中レクでよかったのかな？（6/17 は学生提案ではレクリエーションだけの予定だったが、NPO スタッフの提案でミーティングも行うこととした点を振り返っての発言）ミニヨコ（注 3）の子たちは会議慣れしてるから一日中会議しても飽きなくて、レクの延長線みたいな感じだから、それが楽しみで来てる子もいる。せっかく来てるってことは何かを得たくて来てるということ。6 月に会った時はもちろん顔と名前覚えてないし、レクとか必要だと思うけど大学生的にはどうなのかな？何かを学びとってほしい。子どもたちもそれを望んでるかも？ M ちゃんのゲームが変わる時、TM ちゃんがもうちょっと

頭を使う、考え込むゲームしたいと言っていた。」

（12 月 16 日 守田 FN スタッフインタビュー）

このスタッフの話から、学生側とスタッフ側での認識の違いがあったことに気づかされた。

6. 2 子どもの参加を妨げる要因について

子どもたちへの事後アンケートから、回答者が全員、つづきジュニア編集局以外にも何らかの勉強以外の活動に関わっていることが明らかになった。その意味で子どもたちは大変多忙である。また観察やインタビューの事例として活動の阻害要因となるものが何点か示唆された。

事例 4 他の課外活動に参加する頻度が高くなった：

KK さん：2012 年 12 月 2 日、特命子ども地域アクター成果発表会

KK くんは昨年参加している中学 1 年男子で、企画部に所属している（参加回数：1/23 回（参加回数/全活動日）、記事作成回数：0 回）。昨年度は 7/26 回と、全体の平均参加率（22%）を上回る参加率であり、今年度も自ら立候補して企画部のリーダーとなったことから活躍を期待していたが、第 1 回編集会議（2012 年 4 月 21 日）以来、1 度も姿を見る事がなかった。KK くんは「特命子ども地域アクター」の活動にも参加している。

この日は、横浜市にある県立青少年センターにて、子どもまちづくりアクション成果発表会という、「特命子ども地域アクター」に参加している子どもたちによる活動の成果発表会が行われた。つづきジュニア編集局に参加している子も多数所属しているの、著者を含む 4 名で参与観察を行った。この成果発表会には KK くんも参加しており、発表後インタビューをすることができた。以下の事例は、つづきジュニア編集局以外の課外活動に参加する頻度が高くなったことで参加が減少したことを示している。

成果発表会の後に各プロジェクトチームごとにパネルセッションを行うということで、つづきジュニア編集局にも参加している子どもたちと話ができればと思い、パネルセッションの会場に向かった。そこで KK くんの方から声をかけて来てくれ、少しだけ話を聞く事ができた。KK くん「久しぶりじゃん。なにしてるの？」

守田「KK くん、久しぶりだね！みんなの発表見に来たんだよ！最近忙しいの？」

KK くん「へえ～。うん、部活が忙しいんだよね」

守田「そっか、部活が忙しいんだね…」

KK くん「うん。予定があいたらこっち（特命子ども地域アクター）優先かな。」

(12月2日 守田 FN 特命子ども地域アクター成果発表会)

事例5 他の活動が忙しくなった：MY くん：2012年
7月13日 NOTA への書き込み

MY くんは、2009年度から参加している中学1年男子で、社会部に所属している(参加回数：10/23回(参加回数/全活動日)、記事作成回数：0回)。今年度は社会部のリーダーと、ジュニアタイムズ(1年の活動の成果物として発行する新聞)の編集長に自ら立候補し、就任した。昨年度は14/26回と、全体の平均参加率(22%)を上回る参加率であった。今年度も全体の平均参加率を上回る参加率ではあるが、今年度は全体会議への参加が主で、取材への参加は2/10回しか見られなかった。また、MY くんは「特命子ども地域アクター」の活動にも参加している。

MY くんはNOTAに「ああ中学になると忙しいわ。塾通い始めたし。帰りの遅いしw久しぶりに書いて愚痴すまぬw(ママ)」という書き込みをしていた。この書き込みから、中学生になり塾通いを始めたりなどして、環境が変化して忙しくなったことがうかがえる。

また、MY くんは事後アンケートの「行ったかどうかは別にして、おもしろそうだったと思った(興味を持った、行きたいと思った)取材と実際に行った取材を、例を参考に、それぞれ教えてください。」という質問で、おもしろそうだったと思った取材が10個あったのに対し、実際に参加できた取材は2個であった。このことから、MY くんへの参加の減少の要因は、活動の魅力が減少したと言うよりは、塾通いや特命子ども地域アクターへの参加で忙しくなったことであると思われる。

事例6 スケジュールがあわなくなった：KU くん：
2012年12月16日 クリスマス会

KU くんは、2009年度から参加している高校1年男子で、社会部に所属している(参加回数：2/23回(参加回数/全活動日)、記事作成回数：0回)。受験のためか、昨年度の参加も4/26回と全体の平均参加率(22%)を下回る参加率であったが、今年度は更に減少し、2/22回の参加となった。以下の事例は、つづきジュニア編集局の活動日と自分の予定が合わないことで参加が減少したことを示している。

この日は、東京都市大学横浜キャンパスにて、クリスマス会が行われた。クリスマス会では1年を振り返る事後アンケートを行ったが、これとは別に、個人的にKU くと話をすることができた。

編集会議の最中、会議に参加していないKU くに話しかけた。

守田「どうしたの？」

KU くん「俺はもういいんだよ(笑)」

守田「引退？(笑)」

KU くん「そんなとこっすかねえ(苦笑)」

守田「KU くん来年も続けるの？」

KU くん「高校生だけど来年も編集局には参加したい」

守田&實方「おお！」

(12月16日 守田 FN クリスマス会)

事例9 対象年齢が合わなくなった：YJ さん：2012年
12月16日 スタッフインタビュー

東京都市大学横浜キャンパスにて行われたクリスマス会の後に、NPO スタッフ2名と学生スタッフで、今年度と来年度のつづきジュニア編集局についての話し合いの場を設けた。そこで以下のような話を聞く事ができた。

YJ さんは、2009年度から参加している中学2年女子で、企画部に所属している(参加回数：4/23回(参加回数/全活動日)、記事作成回数：0回)。昨年度は7/26回と、全体の平均参加率(22%)を上回る参加率であったが、今年度は全体の平均参加率を下回る参加率であった。YJ さんは「特命子ども地域アクター」の活動にも参加している。以下の事例は、つづきジュニア編集局の活動日と自分の予定が合わなくなって来たこと、対象年齢が合わなくなったことで参加が減少したことを示している。

I さん「今日 YJ ちゃんと一緒に来たんですけど、彼女は来年受験で、じゃあ選択肢としてどうしようかって…、だけどもうミニヨコは絶対って決めてるから外せない。で、アクターもやっぱりやりたいって言って、で、そうするとジュニア(編集局)外すしかないかなって選択肢だって言う件について、で、どうしてって聞いたら、ジュニア(編集局)はなんか小学校の4,5年の子が増えちゃって、同年代があんまりなくて、会話がなんか…って言って、それがアクターは中学生が多いからって理由だって本人は言った。」

(12月16日 守田 FN スタッフインタビュー)

7 考察

7.1 子どもの参加動機について

仮説の段階では、他の記者と遊ぶ時間を作るなど、子どもたち同士のコミュニケーションの場を増やした方がよいのではないかと考えていたが、参与観察やNOTA上のやり取りから、私達からなにか働きかけをしなくても、子どもたちは自分達なりの方法で(自分達自身で)対人関係の構築を行っていることがわかった。

そもそもコミュニケーションの場を増やした方が良い

と考えた理由は、実践のコミュニティをより活発にするために、子どもたち同士のコミュニケーションが一層円滑に行われることが有効だと考えたためである。しかし実際には、レクリエーション自体については、子どもたちは好意的に受け止めていたものの、それが取材記事を書く際に、取材メモの共有やコメント、協同的なジュニア記者活動に寄与したとは必ずしも言えなかった。取材とそれが発表される記事の件数は決して少なくないが、効果を見るためには十分とはいえなかった面もある。

また、多くの子どもたちは対人関係重視ではなく、つづきジュニア編集局の活動自体に魅力を感じて個々の活動に日に参加しており、友だち関係は活動をより楽しくする一要素ではあるが、つづきジュニア編集局に参加する動機として第一に挙げられるものではないようである。

つづきジュニア編集局に参加している子どもたちは、取材に行くことや記事を書くといったことを、楽しみつつも学ぶことができているのだということが今回の調査から改めて読み取ることができた。

子どもたちは記者体験をしながらも、取材先について調べたり、参加している他の子ども記者とコミュニケーションを取ったりすることができているのである。このことから、子どもたちの主な参加動機は、学校から離れたつづきジュニア編集局という地域メディア活動に参加したからこそ経験できること（取材活動、子ども放送局など）であったと考える。

また実践のコミュニティの強化にとっても活動自体の充実のほうに直接的な効果が期待できることが示唆された。

7. 2 子どもの参加を妨げる要因について

参加を妨げる要因は、第一に部活動や塾などの習い事が忙しいこと、第二に地域アクターに代表されるような、その他のより実践的な地域活動、社会的活動に興味に移ったことだったと考えられる。

調査結果から、第一の要因では、部活動や塾などの習い事が忙しいことの他に、結果の事例にあるように、小学生だった子が中学生に、中学生だった子が高校生になり、環境が大きく変わったことが影響していると考えられる。また、YJさんは、環境が大きく変わったわけではないが、彼女自身の年齢が上がったことが今回の参加率の減少に大きく関係していると考えられる。事後アンケートでも「つづきジュニア編集局の活動に行こうと思うきっかけはなんですか。【会議の時】」と複数回答で尋ねた結果、「大学生がいるから」に○を付けており、彼女自身、年上の人とのコミュニケーションに期待していることがうかがえる。

第二の要因では、つづきジュニア編集局を経て、都筑

区での記者活動からより広域な範囲での社会に目を向けた活動へ関心を持つようになったこと、小学生が多いことや、限られた大人スタッフ、大学生スタッフとしか関わりの持てないつづきジュニア編集局よりも、より多様な人びとと関わりを持ち、共同作業ができる活動に魅力を感じたこと、自分の意見やアイデアが対象に反映されるような活動に魅力を感じたのではないかと考える。事後アンケートより、「つづきジュニア編集局で活動して、自分が変わったな、と思うことがあれば教えてください」という質問に対して、27名中16名が「地域への興味・関心が高まった」と回答している。今回気になった参加者の減少は決してマイナスの要素だけではなく、つづきジュニア編集局の活動を経て地域への興味・関心が高まった結果であるとも考えられる。

8 まとめと提言

今回の調査から、子どもたちがつづきジュニア編集局の活動に第一に期待していることは、友だちづくりや友だちと遊ぶことよりは、学校から離れた地域メディア活動に参加したからこそ経験できること（取材活動、子ども放送局など）であることが再確認された。

今後のつづきジュニア編集局の活動では、子どもたち同士のコミュニケーションの場を増やすレクリエーションを行うにしても、より学びを取り入れた工夫が必要である。また取材活動の充実（都筑区外の取材先を増やし、幅を広げる）や、記者講座といった学べる場を増やすこと、またその成果を発表する機会をつくること子どもたちに望まれる優先課題であることが明らかになった。

さらに、新聞社が主体となっている他のジュニア記者活動団体で取り入れられているような活動を取り入れることが望ましい。まず一つ目が外部のより露出の多いメディアへの記事の寄稿である。つづきジュニア編集局でも「タウンニュース（地域情報誌）」に毎月1回、寄稿しているが、実際に自分たちの記事が掲載された媒体を子どもたちに見せていないので、編集会議などのみんなが集まる場面でフィードバックすることで子どもたちのやる気を高められると考える。

また記事については、スタッフの添削だけではなく、スタッフも子どもと一緒に記事を書き、一緒に学ぶということも大事であると思う。

今回の研究で以前からの参加者の一部にとっては、年齢が高くなり活動に合わなくなったという課題も明らかになった。そのことから、中学・高校生のジュニア記者には、タウンニュースなどの外部のメディアに寄稿向けの記事を中心になって書いてもらうなど、スタッフとして参加してもらってもいいだろう。

なお、今回の分析の限界として、継続的に参加してい

るジュニア記者のデータは取ることができたが、参加をやめてしまった子どもたちには追跡調査をすることができず、それらの子どもの参加動機について分析することができなかつた。本来は、それらの子どもの期待にどのように応えられなかつたのか、という点が重要な改善のヒントになると思われる。この点については今後の研究課題としたい。

謝辞

本研究にご協力いただいた NPO 法人ミニシティ・プラスの皆様、紙媒体の発行を支援頂いた企業の皆様、取材先の皆様、参加者のジュニア記者の皆様、ジュニア記者の保護者の皆様に心より御礼申し上げます。

注

- (注1) つづきジュニア編集局ホームページ
<http://junior.minicity-plus.jp/>
- (注2) 情報共有サイト NOTA については、下記のサイトを参照。なお、このサイトは内部向けでパスワードで管理され、運営スタッフとジュニア記者など関係者のみ閲覧可能となっている。
<http://nota.jp/ja/>
- (注3) ミニヨコとは、子どもたちだけの街を作る、という全国各地にあるプロジェクト、ミニシティ活動の一つであり、ここでは横浜の子どものまちミニヨコハマのプロジェクトに参加している子どもたちを指す。ミニヨコハマは同じ NPO が運営しており、その活動にもジュニア記者が多数参加しているため参加者がかなり重なっている。

参考文献

- [1] 千葉県柏市教育委員会・川村学園女子大学斎藤研究室 (2010):『子どもを取り巻く教育環境等に関する調査のまとめ』、度千葉県柏市内の小中学生・保護者・教師対象調査 http://www.city.kashiwa.lg.jp/soshiki/280700/p007632_d/fil/katei_kyoiku.pdf
- [2] 飯村壮司・國政直樹 (2012):『実践型メディア活動にみる「社会力」の形成：つづきジュニア編集局を事例に』、平成 23 年度 東京都市大学環境情報学部情報メディア学科卒業論文
- [3] 井上陽介・大川和輝 (2010):『実践型メディアリテラシー教育の効果：つづきジュニア編集局を事例に』平成 21 年度 東京都市大学環境情報学部情報メディア学科卒業論文
- [4] 門脇厚司 (2002):『学校の社会力ーチカラのある子どもの育て方ー』、朝日新聞社
- [5] レイヴ, J・ウェンガー, E. (1993):『状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加』(福島真人(解説), 佐伯 胖 (翻訳), 産業図書 (原著 1991))
- [6] 小野田真治・室町雄哉・野徳浩樹 (2011):『実践型メディア活動による学び：つづきジュニア編集局を事例に』、平成 22 年度 東京都市大学環境情報学部情報メディア学科卒業論文
- [7] 實方亜由美・守田 健人 (2013):『地域メディア活動への子どもの参加動機：つづきジュニア編集局を事例に』平成 24 年度 東京都市大学環境情報学部情報メディア学科卒業論文